

「大切なのは「意識する」こと」

千葉県 千葉県立東葛飾中学校 2年 <sup>ありた</sup>有田 <sup>ひいろ</sup>陽彩

最近、「何十年に1回」レベルの災害が頻発し、大規模土砂災害のニュースもよく目にするようになったと感じる。つい先日も、土砂が高速道路に流れ込み、通行止めになったと聞いた。しかし、まだ被害や影響を受けていない人は楽観視し「自分には関係がない」と考える傾向が少なからずあると思う。しかし、忘れてはならない。災害は必ず「思ってもいなかったところ」が被害を受けるものなのだから。

先日、家族で祖父母の家に帰省した。首都圏でありながら自然の安らぎを感じられる場所にある木造平屋で、家の裏側には天然の山を所有している。そして、その山の上にある大きな農園で祖父母は農業を営んでいる。

前回に来た時には、祖父母の家は山に包まれて緑色に見えたことを覚えている。が、今回は何が違う。よく見ると、山はだか妙にシャープになっており、何か灰色っぽい大きなものの一部が見える。

「あれって何なんだろう？」

私は気になり、車を降りて家を半周回り込んだ。すると、そこには想像を絶する光景が広がっていて、数秒間は動けなかった。無理もなからう、秋には栗・きのこがとれるほどのあの山はだの面影はもう見えず、代わりに城壁を思わせる巨大なコンクリートブロックの集合体ができているのだから。壁を見上げて立ちすくむ私に、祖父は優しく声をかけた。

「いらっしやい。この壁のおかげで、自分らは安心して暮らせるんだよ。」

夕方、親戚たちが広間で一堂に会すと、祖父母は壁を造った経緯を語り始めた。

「2年前だったっけなあ…」

ある日、家に市の職員の方がやって来たという。

「有田さんが所有されている山の件なのですが、土砂災害の危険性が高まっているのでお知らせに上がりました。」

その時、砂防用の壁の建設を推奨されたらしいが、取り急ぎ対策を講じることはなかった。1年後、全国に大きな被害をもたらした台風12号は祖父母の家にも容赦なく猛威をふるった。その時の豪雨で家の裏側の地面が少し崩れ、その上に生えていた大木が家の方に傾いてきたという。これはまずいと考えた祖父は、私のおじにクレーン車で木を引き抜いてもらった。しかしその時に大きな木の枝が屋根を掠った。なんと、巨木はそれだけで屋根を大きく損傷させてしまったのだ。大きな木にこれだけの破壊力があるとは思っていなかった祖父母は、「もしこれが直撃したら…」と戦りつしたそうだ。その後も山はだに亀裂が入ったり、大きな岩が庭に降ってきたりしてまともに眠れない日々が続いたらしい。何もそんなオーバーな…と私は思った。しかし、この家の間取りを思い出して青ざめることとなった。あろうことか、祖父母の寝室は崖側にあったのだから。とうとう危機感を覚えた祖父は決断した。

「家族と財産を守らないとな。」

工事はすぐに始まった。崖を削り、倒れそうな木は伐る。そして大きなコンクリートブロックを階段状にすき間なくしき詰める。ショベルカー、ブルドーザーはもちろんのこと、八脚クレーンも活躍し、重機が入れない場面では人の力でブロックを積んでいった。3ヶ月の期間と労力の果てに、最大高7メートル・幅15メートル・厚さ2メートルのあの壁ができ上がった。さらに、壁の裏側には2メートルにわたって砂利がしき詰められ、そこから無数の排水管が伸びている。排水がしっかりできるので、深層崩壊も防げるという優れたものだ。私が感心していると、つかの間父がこう聞いた。

「確かに安心は最優先だけど、これは流石に高くついたんじゃないか。」

父の言う通りだ。ここまで充実した砂防施設は祖父母の負担も大きく大変だっただろう。しかし、祖母は屈託のない笑顔でこう語った。

「費用は市が折半してくれたよ。」

なんとということだろうか。自治体が土砂災害防止のためにここまでしてくれるとは考えていなかった。今回の帰省は、いつもより実り多いものになった。

今回の経験から学んだことは、土砂災害を「意識する」ことの大切さだ。現に、誰一人崩れると思っていなかった崖が崩れ、対策を知らない祖父母は怯えた。しかし、適切な知識と行動力さえあれば、こうした事態に対処し危険を回避できるはずだ。例えば、ハザードマップを時々確認したり、行政のサポートについて知るのも良いだろう。そして、身近な小川などの小さなものにも危険意識を片隅に持つことで、少なくとも「想定外」ということはなくなり、逃げ遅れなども減ると思う。将来私が家を持つときも、利便性や価格だけでなく立地の安全性にも気を配り、必要なら砂防設備を作り、どんな時も安全・安心な家庭を築きたいと思う。